

# 外国籍児童を対象とした画像と会話を重視した作文学習

勝井まどか\*1・福島耕平\*2・下村勉\*3  
Email: madoka.katsui@gmail.com

- \*1: 鈴鹿市立合川小学校
- \*2: 鈴鹿市教育委員会
- \*3: 三重大学名誉教授

◎Key Words 外国籍児童, 日本語指導, 作文, タブレット端末

## 1. はじめに

小学校に在籍する日本語指導の必要な外国籍児童は、文部科学省の平成 28 年度調査では、22,156 人となっており、増加傾向にある。また、日本語指導の必要な外国籍児童も小学校では 7,250 人となっており、年々増加している<sup>1)</sup>。

日本語指導において、日常生活を送るためのコミュニケーション手段としての「話す」「聞く」技能は習得しやすい傾向にある。しかし、「読む」「書く」技能は習得が難しく、「日常会話はできるが、文章内容を読みとることや文章を書くことが難しい」という現状がある。特に、教科学習では、学年が上がるにつれて、抽象度の高い語彙力や認知力が求められるため、「話す」「聞く」と「読む」「書く」技能の差が開いていく傾向がみられる。

清田(2003)は、小学校からの学校教育が基本的に書き言葉の文脈によって展開されていることを考えれば、書く力を育てていくことは学習面での基礎・基本となる力を獲得するという意味において重要であるとしている<sup>2)</sup>。

小学校の日本語指導教室等の指導では、言葉の動作化や画像等の視覚支援が、日本語理解のために有効な支援の 1 つとされている。また、文章を書かせる際には、教員や支援者と会話を通して、児童が伝えたいことや書きたいことを引き出し、児童の作文学習を支援している。会話では、児童の日本語レベルに合わせた問答により、文章作成に必要な言葉や事象が具体化されていく。

しかし、話し言葉を瞬時に文章に直して表記することは、児童にとって大変難しい学習である。そこで、会話を録音し、再度児童に聞かせることによって、児童が自身の言葉を客観的に捉え、文章に直すことのハードルが低くなるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語指導が必要な外国籍児童を対象とした作文学習において、画像と会話、会話の録音を聞いて文章作りをする学習が、対象児の文章を書く学習にどのような効果をもたらすか検討を行うことである。

## 3. 学習法の特徴

### 3.1 会話

本実践は、対象児童と教員の会話を重視する。教員は、話の内容やキーワードを引き出すための問いかけをして、その会話を録音する。児童は、録音した会話を何度も聞き直せるため、その時の情景や思考が想起しやすくなり、そ

の後の文章作成がスムーズにできると思われる。

### 3.2 ICT の活用

文章作成には、iPad アプリ『ロンリー』を使用する。『ロンリー』は、筆者らが共同開発をした画像の活用や段落の入れ替えが自由にできる文章作成支援アプリである(図 1)。画像の活用は、児童の伝えたいことを視覚的に支援できるだけでなく、画像をきっかけに話題を共有できるため、教員とのスムーズな会話につながる。また、段落が自由に入れ替えられるため、書いた文章の順序を試行錯誤することで、児童の伝えたい内容により一層近づける。『ロンリー』には、ログ機能があるため、文章作成過程の分析が可能である。

文字入力には、手書き文字入力ソフト Mazec(マゼック)を活用する(図 2)。Mazec により、ひらがなの書字が漢字変換されるため、外国籍児童の文字入力のハードルを下げることができる。



図 1 『ロンリー』の文章作成画面

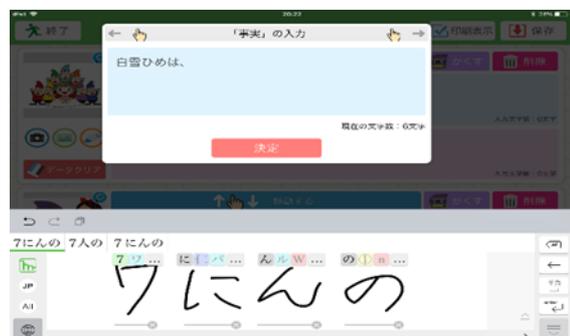


図 2 Mazec による手書き文字入力

## 4. 実践

### 4.1 対象児童

対象児童は、小学2年生の外国籍児童である。週3時間を通常学級から取り出して、個別で日本語指導を受けている。生活上の会話に困難さはみられないが、漢字を正しく書けない。作文では誤表記がみられ、本児の苦手意識も強いので、個別の支援が必要である。

対象児は、これまでiPadを使って漢字の復習をしたことが数回ある程度で、『ロンリー』の活用は初めてである。ローマ字は未習であるため、ローマ字入力にはできない。

#### 4.2 実践方法

実践は、日本語の個別学習の時間に行った。45分間の授業のうち、30分間は本実践を行い、15分間は漢字等の学習を行った。実践には、iPad Proを活用した。全ての実践はビデオ録画し、録画をもとに実践の検証を行った。

概要は以下の通りである。

##### ステップ① (30分×4回)

国語で既習した昔話を扱った。『ロンリー』に各場面の挿絵を取り込む。画像を見ながら、話のあらすじや登場人物について教員と会話をし、会話を録音する。対象児は、録音された会話を聞きながら、『ロンリー』の記述欄にあらすじや登場人物についての文章を書いていく。

##### ステップ② (30分×4回)

校外施設へ交流学习に行ったことをテーマにした。『ロンリー』に写真を取り込み、写真を見ながら、その時の様子や自身の気持ち等について教員と会話をし、会話を録音する。録音した会話を聞きながら、『ロンリー』の記述欄に文章を書いていく。

### 5. 結果

録画から以下のような対象児の姿が明らかになった。

- (1) 対象児は、録音された会話を聞く途中、「止めて！」と言い、「先生、『～しました。』やな？」のように会話の内容を書き言葉に言い直して、記述欄に文を入力していた。また、「もう1回聞かせて。」と、繰り返し聞くことがあった。
- (2) 『ロンリー』に取り込む画像を選択するには、「こちらの絵がいい。」といって、対象児自身が使いたい画像を選択していた。対象児は会話中、取り込んだ画像を指しながら、「この〇〇が～したの。」「ここで〇〇した。」のように、そのときの様子や気持ちを話していた。教員も、「これは何を作ったの？」というように、対象児に問いかける際、画像を活用した。
- (3) Mazec を活用してひらがなを手書き入力した際、予測変換の中から適当な漢字を選んでいった。対象児の書いたひらがなを誤認識することが度々あったが、対象児はそのたびに正しく丁寧に書字し直していた。
- (4) 本実践を開始してから、授業が始まると、「iPad しょ。」「続きがしたい。」という発言があった。また、『ロンリー』での記述が終わると、作文の全文が見える印刷画面を開き、「こんなに書けた！」と、満足そうに書いた文を読み上げていた。

### 6. 考察

他者との会話は、児童が出来事や感じたこと等をアウトプットするために有効であるが、同時に書き言葉としてアウトプットし直すことは、「書く」ことが苦手な外国

籍児童にとっては、大変困難な学習である。

再生される会話文を聞いて、書き言葉に言い直す対象児の様子から、録音した会話を聞くことが、話し言葉を書き言葉へ変換する支援となったと考える。また、対象児自身の書き言葉への処理速度に合わせて、会話の再生を止めたり、繰り返し聞いたりできることも、「書く」ために有効であることがわかった。

対象児が取り込んだ画像を指しながら積極的に話す姿がみられたことから、画像提示は、話すきっかけになったり、そのときのことを想起しやすくなったり、また、児童の話したい意欲を助長したりするといった点で有効な支援であるといえる。また、画像選択の時点から児童自身が関わることが、その後の作文学習を行うためのモチベーションにも影響があると考えられる。

本実践では、文字入力に Mazec を活用した。対象児が漢字変換を容易にできたことから、漢字を読めても、正しく書けない児童にとって、本実践において活用したような手書き文字入力システムは、有効な支援だと考える。

児童が正しくひらがなや漢字を書けるように指導することは必要であるが、作文を書く際に最も重要な「文を考える」ことに焦点を当てるためには、他の課題となっている学習要素を取り除くことが積極的に学習に向かうための大きな支援となる。

支援が何もない状態での作文学習では、何から書いたらいいのか分からず、書き始めるまでに時間を要し、原稿用紙半分程度書くと、「これでいいや。」「もういい。」といった言葉で終わることが多い。しかし、実践中「iPad しょ。」等の対象児の意欲的な発言が聞かれた。また、文章作成が終わるたびに、全文を読み返し満足した表情がみられたことから、作文学習における本実践方法は、外国籍児童に対する有効な学習方法となる可能性がある。

### 7. おわりに

本研究では、画像と会話を重視し、録音した会話を聞きながら作文学習を進めた。その中で、日本語指導が必要な外国籍児童が、苦手とする作文学習に意欲的に取り組むことができた。

しかし、本研究では、(1)画像と会話を重視したこと、(2)会話を録音し聞きながら書いたこと、(3)手書き入力システムや ICT を活用したことなど、3つの要素を分けて検証できていない。今後の課題としたい。

### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費奨励研究（課題番号 19H00184）の助成を受けて行われた。

### 参考文献

- (1) 文部科学省：“「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」の結果について”，(2003). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/\\_icsFiles/afldfile/2017/06/21/1386753.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afldfile/2017/06/21/1386753.pdf) (参照日 2019.6.1)
- (2) 清田淳子：“社会科と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み：日本語指導を必要とする海外帰国生徒を対象に”，言語文化と日本語教育, Vol.26, pp.1-13 (2003).